

日本語の語彙的複合動詞における 「原因」の複合動詞の組み合わせ

何 志明

キーワード：「原因」の複合動詞，前項動詞，後項動詞，動作主の意志，一義的経路の制約

1. はじめに

日本語の語彙的複合動詞の中には、次のようなものがある。

- (1)(i) あふれ落ちる，溺れ死ぬ，折れ曲がる，崩れ落ちる，焦げ付く，流れ着く，
抜け落ちる，焼け落ちる，焼け焦げる，焼け死ぬ，...
- (ii) 遊ぶくたびれる，着膨れる，立ち疲れる，泣き濡れる，寝静まる，寝惚ける，
飲みつぶれる，走りくたびれる，走り疲れる，働きくたびれる，読み疲れる，...
- (2) 洗い落とす，奪い取る，押し開ける，押し出す，折り曲げる，勝ち取る，切り倒す，
蹴り飛ばす，吸い上げる，たたき壊す，騙し取る，殴り殺す，殴り倒す，
投げ上げる，投げ入れる，投げ飛ばす，塗りつぶす，拭き取る，踏み荒らす，
踏み入れる，踏み固める，踏み殺す，踏みつぶす，振り混ぜる，焼き捨てる，...
- (3)(i) 転がり落ちる，転がり出る，滑り落ちる，流れ落ちる，流れ出る，跳ね上がる，
舞い上がる，舞い落ちる，...
- (ii) 歩き回る，駆け上がる，駆け下りる，駆け抜ける，駆け登る，語り明かす，
探し回る，忍び寄る，滑り降りる，尋ね歩く，連れ帰る，連れ去る，飛び上がる，
飛び降りる，飛び出る，飛び回る，飲み歩く，這い上がる，走り去る，走り回る，
舞い降りる，見守る，持ち歩く，持ち帰る，持ち寄る，...

以上の(1),(2),(3)の複合動詞はすべて「動詞+動詞 (V+V)」の形をしている。松本 1998, Matsumoto 1996, 由本 1996 などの先行研究では、前項動詞(V1)と後項動詞(V2)における意味的な関係によって、(1)の複合動詞を「原因」の複合動詞、(2)の複合動詞を「手段」の複合動詞、(3)の複合動詞を「様態・付帯状況」の複合動詞と分類している。ところが、先行研究では以上のように分類する理由は詳しく言及されていない。さらに、次のような問題もある。例えば、「焼け落ちる」は、Matsumoto 1996 では「原因」の複合動詞、由本 1996 では「付帯状況」の複合動詞として分類されている。「切り倒す」は、影山 1999 では「手段」の複合動詞、由本 1996 では「手段・様態」の複合動詞として分類されている。一方、「原因」の複合動詞と「手段・様態」の複合動詞に関して、影山 1993 : 116 では次のように述べている。

手段・様態という点、「学生チームが社会人チームに競り勝つ、汚れを拭い取る、ハードル

を跳び越える」のような例が典型的であるが、原因と手段・様態の区別は明瞭ではなく、「押し倒す、切り倒す」は原因を表わすとしても「薙ぎ倒す、張り倒す、拝み倒す、食い倒す」となると様態の意味が鮮明になる。このような考察から、日本語の V-V 複合動詞においては、「原因」という範疇は設けない。

このように、影山 1993 では、「原因」の複合動詞と「手段・様態」の複合動詞の区別は明瞭ではないため、「原因」の複合動詞は設けないとしているが、影山 1999：195 では、「原因」、「手段」、「様態」の複合動詞における V1 と V2 との意味的な関係を次のように述べている。

「原因」の複合動詞：V1 の結果, V2 「手段」の複合動詞：V1 することによって, V2 「様態」の複合動詞：V1 しながら V2

以上の記述をまとめると、研究者によって同じ複合動詞でもさまざまな分類の方法があることが分かる。このような「V+V」の形をしている 3 種類の複合動詞をそれぞれの V1 と V2 の意味的な関係によってどのように区別することができるかということは大きな問題となる。一般的に、複合動詞における適切な組み合わせ及び不適切な組み合わせについては、他動詞調和の原則(影山 1993, 1999)と主語一致の原則(松本 1998)で説明できる。他動詞調和の原則とは、「動詞+動詞」の複合において、同じタイプの項構造、すなわち、(a). 外項(行為者, 原因, 経験者)を持つ「焼く」などのような他動詞または「働く」などのような非能格自動詞の動詞同士が複合される。(b). 外項を欠く「焼ける」などのような非対格自動詞の動詞同士が複合される。例えば、「焼け死ぬ」や「焼き殺す」のようなものは適切な組み合わせであるが、「*焼け殺す」や「*焼き死ぬ」のようなものは他動詞調和の原則に違反しているため、不適切な組み合わせである。一方、主語一致の原則とは、通例、2つの動詞の主語として実現する項が同一物を指す、というもので、主語になるものであれば外項同士(あるいは内項同士)である必要はない。この点で他動詞調和の原則よりも緩い制約である。しかしながら、(1),(2),(3)の複合動詞はすべて前述の2つの制約を満たしているため、3者の間の違いがどこにあるかということも前述の2つの制約を用いても区別することができない。本稿は先行研究よりさらに一步踏み込み、(1)の「原因」の複合動詞を中心に取り上げ、それらにおける V1 と V2 は一体どのような種類の動詞であるか、そして具体的に「原因」の複合動詞として認められる「V1+V2」の組み合わせはどのような条件を満たさなければならないか、について検討する。具体的に、先行研究で「原因」の複合動詞として分類されている「焼け死ぬ」や「抜け落ちる」という実例を挙げ、以下のようなことを検討したい。

(4)(a) (i). なぜ「焼ける」や「抜ける」のような動詞が V1 になれるか、そして、それらの V1 になれる動詞は一体どのような種類の動詞なのか、

(ii). なぜ「死ぬ」や「落ちる」のような動詞が V2 になれるか、そして、それらの V2 になれる動詞は一体どのような種類の動詞なのか。

(b). 「焼け死ぬ」や「抜け落ちる」のように、V1 と V2 の可能な組み合わせは一体どのような種類の V1 と V2 で構成されるもの (V1+V2) であるか、

本稿の試みは、複雑な複合動詞を体系的に分類する方法の可能性を示すものであり、とり

わけ「原因」の複合動詞における V1, V2 の種類を提示するものであると考える。考察の方法として、松本 1998 における「原因」の複合動詞の記述を再検討し、「原因」の複合動詞となるものがどのような条件を満たさなければならないのか、ということを示した上で、Goldberg 1991 の一義的経路の制約を利用し、「原因」の複合動詞における V1 と V2 の可能な組み合わせを明らかにする。

2. 先行研究

「原因」の複合動詞に関して、松本 1998、由本 1996 及び Matsumoto 1996 はそれぞれ次のように述べている。

- (5) 後項が状態変化を表わし、前項がそれを引き起こす原因となる出来事を表わす複合動詞は原因複合動詞と呼ぶことができる。(松本 1998)
- (6) 「原因」の複合動詞においては、結果を表わす後項動詞が非動作主的でなければならない。(由本 1996 及び Matsumoto 1996)

松本では、「焼け死ぬ」や「抜け落ちる」などのような「非動作主的な動詞＋非動作主的な動詞」及び、「泣き滞れる」や「読み疲れる」などのような「動作主的な動詞＋非動作主的な動詞」の組み合わせは適切な「原因」の複合動詞とされているが、「*疲れ座る」や「*転び叫ぶ」などのような「非動作主的な動詞＋動作主的な動詞」及び、「*聞き帰る」や「*見向かう」などのような「動作主的な動詞＋動作主的な動詞」の組み合わせは「原因」の複合動詞として不適切であるとされている(本稿では、先行研究で動作主的な動詞と呼ばれる「帰る」や「見る」などのような動詞を「動作主の意志による行為を表わす動詞」、先行研究で非動作主的な動詞と呼ばれる「焼ける」や「死ぬ」などのような動詞を「動作主の意志によらない出来事を表わす動詞」と呼ぶ)。松本では、その理由を、原因となる出来事が、結果となる出来事の発生と進行を完全に決定できるものでなければならないため、V2 が表わす出来事の中に動作主の意志が入ってはならないとしている。しかし、具体的に上記の(4)の問題に関してはまだ詳しく言及されていない。もう一度(1)と(3)の複合動詞を見ると、次の(7)のような現象が見られる。

- | | |
|--------------------|--------------------|
| (7)(i). 「原因」の複合動詞： | 流れ着く、逃げ失せる |
| 「様態・付帯状況」の複合動詞： | 流れ落ちる、逃げ回る |
| (ii). 「原因」の複合動詞： | あふれ落ちる、崩れ落ちる、抜け落ちる |
| 「様態・付帯状況」の複合動詞： | 転がり落ちる、舞い落ちる |

(7)(i)の「原因」の複合動詞と「様態・付帯状況」の複合動詞の場合、同じ V1 を持っている(太字で示す「流れる」と「逃げる」)。同様に、(7)(ii)の場合、両者とも同じ V2 を持っている(太字で示す「落ちる」)。言い替えば、同じ V1 または V2 を持つ複合動詞同士が、異なるタイプの複合動詞と分類される場合がある。さらに、松本の指摘では、動作主の意志によらない出来事を表わす動詞が「原因」の複合動詞における V2 の特徴の 1 つであると指摘しているが、「流れ落ちる、転がり落ちる」のような「様態・付帯状況」の複合動詞における

V2 も動作主の意志によらない出来事を表わす動詞であるため、動作主の意志によらない出来事を表わす動詞が「様態・付帯状況」の複合動詞における V2 の特徴の 1 つであることが言える。すなわち、ここで挙げた「原因」の複合動詞と「様態・付帯状況」の複合動詞を区別するには、V2 の特徴以外に別の制限があると考えられる。このように形だけでは区別するのが難しい複合動詞を有効に区別するため、本稿では動詞の種類に注目する。(1),(2),(3)の複合動詞を見ると、それぞれのタイプの複合動詞における V1 と V2 は異なる種類の動詞で構成されることが分かる。例えば、(1)の複合動詞における V2 はすべて動作主の意志によらない出来事を表わす動詞である。一方、(1)(i)の複合動詞における V1 は動作主の意志によらない出来事を表わす動詞であるが、(1)(ii)の複合動詞における V1 は動作主の意志による行為を表わす動詞である。(2)の複合動詞における V1 と V2 はすべて動作主の意志による行為を表わす動詞である。また、(3)(i)の複合動詞における V1 と V2 は動作主の意志によらない出来事を表わす動詞であるが、(3)(ii)の複合動詞における V1 と V2 は動作主の意志による行為を表わす動詞である。すなわち、それぞれのタイプの複合動詞における V1 と V2 の組み合わせが異なる。次の 3 節では、本稿の主張において有効であると考えられる影山 1996、影山 1999、松本 1997 が提案している動詞の分類を利用し、動詞の意味を適確に把握した上で、「原因」の複合動詞として可能な組み合わせにおける V1 及び V2 の考察を行なう。

3. 影山 1996、影山 1999、松本 1997 による動詞の分類

それぞれの動詞は互いに無関係な意味構造を持つのではなく、「移動」や「状態変化」や「活動」などといった共通の意味を持ち、そのタイプによって幾つかのグループにまとめられると考えられる。影山 1996、影山 1999、松本 1997 では動詞を次のように分類している。

- (a). 状態動詞 (state) : 物や人における物理的な位置ないし抽象的な状態を表わす動詞
例 : (机の上に本が)ある, (英語が)できる, ...
- (b). 動きを伴う動詞
 - (i). 変化動詞 (change) : ある位置/状態に達することを表わす動詞
 - (1). 位置変化動詞 : ある位置に達することを表わす動詞
例 : (ナイフが胸に)刺さる, (釘が壁から)抜ける, ...
 - (2). 状態変化動詞 : ある状態に達することを表わす動詞
例 : (家が)崩れる, (テレビが)壊れる, ...
 - (ii). 移動動詞 (motion) : 移動, すなわち時間の経過に伴って起こる人や物体位置の変化を表わす動詞
例 : 上がる, 下がる, 落ちる, 曲がる, 歩く, 走る, 跳ねる, 飛ぶ, 流れる, ...
- (c). 活動動詞 (activity) : 何らかの結果状態や位置の変化を伴わない行為を表わす動詞
例 : 働く, 遊ぶ, 踊る, 読む, 待つ, ...
- (d). 使役動詞 (causation) : この「使役」という概念, すなわち外的な誘因が対象物の位置/状態変化を引き起こす行為を表わす動詞

- (1). 位置変化を表わす使役動詞 例：(木を)倒す,(ナイフを)取る,...
- (2). 状態変化を表わす使役動詞 例：(テレビを)壊す,(りんごを)切る,殺す,...

4. 「原因」の複合動詞として適切な組み合わせにおける V1 及び V2 の考察

(7)(i)(ii)から、「原因」の複合動詞と「様態・付帯状況」の複合動詞との間の区別は明瞭であるとは言えない。それは、「原因」の複合動詞を「様態・付帯状況」の複合動詞と区別するための基準が明確になっていないため、1つの複合動詞を「原因」の複合動詞か「様態・付帯状況」の複合動詞かどちらに分類すべきか、を判断するのが容易ではないからである。本稿では、まず「原因」と「様態・付帯状況」の複合動詞の境界線を明確にしなければならない。ここでは、V1 と V2 との発生時間、経過が必要とする時間(持続時間)の関係を注目し、「原因」と「様態・付帯状況」の複合動詞の違いを検討し、「原因」の複合動詞として適切な組み合わせにおける V1 及び V2 の考察を行なう。

影山 1999:196 では、V1 が表わす出来事の発生時間(t_1)と V2 が表わす出来事の発生時間(t_2)において、「様態・付帯状況」の複合動詞の場合は $t_1 = t_2$ であるが、「原因」の複合動詞の場合は $t_1 \geq t_2$ であるとしている。簡単に説明すると、「持ち歩く」や「転がり落ちる」の場合、「持つ」や「転がる」の t_1 と「歩く」や「落ちる」の t_2 との関係はほとんど完全に同時($t_1 = t_2$)と考えてよい。さらに「太郎が銃を持ち歩く」という文を考えてみよう。太郎は「銃を持つ」と「歩く」の2つの行為を同時に行なわないと、「銃を持ち歩く」ことにはならない。すなわち、「銃を持っているが歩かずに立ったり座ったりしている」も「銃を持たずに歩いている」も「銃を持ち歩く」とは言えないわけである。「歩く」という動作が継続する限り、「銃を持つ」という動作も継続しなければならない。言い替えれば、V1 と V2 が表わす出来事の発生時間以外、さらに「銃を持つ」という動作(V1)の持続時間は「歩く」という動作(V2)の持続時間と同じであると考えられる。「持つ」という動作が「歩く」という動作より先に終了してしまう場合でも、「歩く」という動作が「持つ」という動作より先に終了してしまう場合でも、「持ち歩く」とは言えない。一方、影山 1999:196 では、「手段」及び「原因」の複合動詞の場合、前項動詞が表わす出来事と後項動詞が表わす出来事の間にはわずかも発生時間の前後関係が認められ、すなわち、前項動詞が表わす出来事が先行して、それより少し後に(あるいは、それとほぼ同時に)後項動詞が表わす出来事が起こるから、時間の流れは $t_1 \geq t_2$ という関係になる、としている。「あふれ落ちる」や「折れ曲がる」などの場合、「あふれる」と「落ちる」及び「折れる」と「曲がる」はほぼ同時に発生するのである($t_1 = t_2$)と考えてもよい。一見この2つの複合動詞は「様態・付帯状況」の複合動詞にも見えるが、(水が)あふれたとたんすぐ落ちてしまう、(金属片が)折れたとたんすぐ曲がってしまう、という説明が成立するから、V1 の持続時間の幅がほぼないと考えられる。すなわち、V1 と V2 の持続時間が短くても存在する「持ち歩く」や「転がり落ちる」と違う。一方、「流れ着く」や「読み疲れる」などの場合、「流れる」や「読む」の t_1 と「着く」や「疲れる」の t_2 との間にわずかも発生時間の前後関係があると認められる。「流れる」や「読む」が

先に発生し、その後「着く」や「疲れる」が発生する。以上をまとめると、「持ち歩く」や「転がり落ちる」などのような複合動詞は「様態・付帯状況」の複合動詞と認められる。一方、「あふれ落ちる、折れ曲がる、焼け死ぬ、抜け落ちる、流れ着く、読み疲れる」などのような複合動詞は「原因」の複合動詞と認められる。「原因」の複合動詞と「様態・付帯状況」の複合動詞の間にある違いは次のようにまとめられる。

(8) 「原因」の複合動詞の場合：

(i). V1 の発生時間と V2 の発生時間との関係：

①. V1 が V2 より先に発生する。または、②. V1 が V2 とほぼ同時に発生する。

(ii). 上の②の場合、V1 が発生したとたん直ちに V2 も発生する。V1 の持続時間の幅がほとんどない。

(9) 「様態・付帯状況」の複合動詞の場合：

(i). V1 の発生時間と V2 の発生時間との関係：V1 が V2 と同時に発生する($t_1 = t_2$)

(ii). V1 が表わす出来事の時継続時間は V2 が表わす出来事の時継続時間と同じである。しかも、この V1 と V2 の時継続時間はわずかであっても存在する。言いかえれば、V1 と V2 が表わす出来事が同時に発生し、次の瞬間 V1 が表わす出来事が終了してしまい、V2 が表わす出来事がそのまま継続していくということは V1 が V2 の「様態・付帯状況」を表わすことができないと考えられる。

次に、(8)を用いて、3 節で挙げた動詞について、以下の 2 点に注目し、「原因」の複合動詞における V1 と V2 の種類を検討する。

その 1. V1・V2 になれない動詞及び V1・V2 になれる動詞の種類

その 2. その 1 で検討した V1・V2 になれる動詞の適切な組み合わせ

4.1 その 1 の考察：V1・V2 になれない動詞及び V1・V2 になれる動詞の種類

(6)から、以下のような動作主の意志による行為を表わす動詞は V2 として不適切である。

(10) 移動動詞：歩く、走る、...

活動動詞：働く、踊る、(友達を)待つ、(本を)読む、...

位置変化を表わす使役動詞：吸う、入れる、積む、...

状態変化を表わす使役動詞：折る、切る、焼く、...

さらに、結果を示す V2 は何らかの位置や状態を表わす動詞でなければならない。「(机の上に本がある)」や「(英語ができる)」などのような状態動詞は位置的な変化も状态的な変化も伴わないので、例えば、「机の上に本を置いた結果、机の上に本がある」ということや「英語を学んだ結果、英語ができる」ということを「*置きある」や「*学びできる」で表現できず、V2 として不適切であると考えられる。一方、次のような位置や状態を明確に示す動作主の意志によらない出来事を表わす動詞が V2 として適切であると考えられる。

(11) 位置変化動詞：着く、失せる、付く、...

状態変化動詞：死ぬ、(くたくたに)疲れる、...

移動動詞：落ちる, ...

また、次の(12)のような動作主の意志による行為を表わす動詞も動作主の意志によらない出来事を表わす動詞も V1 が表わす出来事（原因となる出来事）となりうる。

(12) (a). 動作主の意志によらない出来事を表わす動詞：

位置変化動詞：(髪が)抜ける, ...

状態変化動詞：(屋根が)焼ける, (針金が)折れる, ...

移動動詞：(水が)流れる, ...

(b). 動作主の意志による行為を表わす動詞：

移動動詞：歩く, 逃げる, 走る, ...

活動動詞：働く, 踊る, (友達を)待つ, (本を)読む, ...

位置変化を表わす使役動詞：吸う, 飲む, 着る, ...

状態変化を表わす使役動詞：折る, 焼く, ...

4.2 その2の考察：その1で検討した V1・V2 になれる動詞の適切な組み合わせ

本節では、「原因」の複合動詞として可能な V1・V2 の組み合わせを検討する。4.1 節で上げた V1 になれる(12)の動詞と V2 になれる(11)の動詞の中で、一体どのような(12)の動詞とどのような(11)の動詞との組み合わせが適切であるか。以下、Goldberg 1991 の一義的経路の制約 (Unique Path Constraint) と(8)の「原因」の複合動詞が持っている特徴を利用し、「原因」の複合動詞として適切な V1・V2 の組み合わせを考察する。まず、一義的経路の制約について簡単に触れておく。

(13) Goldberg 1991 の一義的経路の制約 (和訳は影山 1999 : 205 を引用したものである)

X という物体について、単文内で X を 2 つ以上の異なる経路 (Path) について叙述することはできない。単一の経路(a single path)という概念は次の 2 つの場合を規定している：

(a). X は特定の時点において 2 つの別々の位置に移動するようには叙述できない。

(b). 移動は単一の情景(landscape)の中で 1 つの経路を辿らなければならない。

影山 1999 : 206 では、一義的経路の制約について次のように指摘している。

ここ(一義的経路の制約)で「経路」というのは、物理的な移動の道筋だけでなく、抽象的な状態変化の過程も指していて、要するに「状態変化と位置変化の両方を 1 つの述語を用いて表現することはできない」と述べている。(傍点は筆者によるもの)

さらに、影山 1999 : 208 では、単なる働きかけを示す活動動詞、例えば、(14)の「踏む」などのような動詞は何かを踏んだからといって、その物の位置や状態が変化するとは限らないとしている。

(14) (i). *ボールを遠くへ踏む。 (∵「踏む」は位置変化を含意しない)

(ii). *ガラスをコナゴナに踏む。 (∵「踏む」は状態変化を含意しない)

影山の指摘によれば、「踏む」のような活動動詞の場合、後に来る動詞は位置変化であって

も、状態変化であっても、一義的経路の制約には反しないから、以下(15)(i)(ii)のような複合動詞では、V2には位置変化を表わす動詞も状態変化を表わす動詞も来ることができる。

(15) (i). 踏む+位置変化を表わす使役動詞：踏み入れる, 踏み倒す, 踏み付ける, ...

(ii). 踏む+状態変化を表わす使役動詞：踏み荒らす, 踏み固める, 踏みつぶす, ...

以上、一義的経路の制約をまとめると、次のようなことが言える。

(イ). 複合動詞のような1つの述語の中で、V1とV2における組み合わせにおいて、状態変化に関わる出来事を表わす動詞と位置変化に関わる出来事を表わす動詞との組み合わせは不適切であるとなっている。一方、

(ロ). 何の結果状態や位置の変化を伴わない行為を表わす活動動詞と状態変化に関わる出来事を表わす動詞との組み合わせでも、位置変化に関わる出来事を表わす動詞との組み合わせでも一義的経路の制約に反しないため、適切な組み合わせであると認められる。

以下、4.1節で挙げた動詞の中で、どのような動詞が位置変化に関わる出来事を表わす動詞なのか、どのような動詞が状態変化に関わる出来事を表わす動詞なのか、次のように示す。

(16) 位置変化に関わる出来事を表わす動詞と考えられる動詞

(a). 動作主の意志による行為を表わす動詞の場合：

移動動詞：歩く, 走る, 逃げる, ...

位置変化を表わす使役動詞：吸う, 飲む, 着る, ...

(b). 動作主の意志によらない出来事を表わす動詞の場合：

位置変化動詞：(髪が)抜ける, (ご飯が釜に)付く, ...

移動動詞：落ちる, (水が)流れる, ...

(17) 状態変化に関わる出来事を表わす動詞と考えられる動詞

(a). 動作主の意志による行為を表わす動詞の場合：

状態変化を表わす使役動詞：折る, 焼く, ...

(b). 動作主の意志によらない出来事を表わす動詞の場合：

状態変化動詞：(屋根が)焼ける, (針金が)折れる, 死ぬ, 疲れる, ...

「原因」の複合動詞において一義的経路の制約から、基本的には、V1もV2も(16)の動詞同士あるいは(17)の動詞同士の組み合わせは適切であるが、(16)の動詞と(17)の動詞との組み合わせは不適切である。ここでは、一義的経路の制約以外に、(8)の「原因」の複合動詞が持っている特徴を用いて、「原因」の複合動詞の適切な組み合わせを考察する。まず、V1がV2より先に発生する場合($t_1 > t_2$)を検討する。この場合、V1とV2の具体的な発生順序は次のように考えられる。

(18) V1が先に発生してその動作が継続し、ある程度の時間が経過してからV1が終了する。その後V2が発生する。

次に、V1とV2の種類を考察する。V1の動作においてある程度の時間的な幅が許されるため、アスペクト的に動作の継続を表わす動詞が適切であると考えられる。V2はアスペクト

的に瞬間的な動作を表わす動詞でなければならない。動詞が表わす動作は一定の時間続く状態を表わすのか、それとも瞬間的に終了してしまうのか、というアスペクトの側面から動詞を分類する金田一 1976 を用いて説明する。金田一 1976 : 7-12 では、「読む」や「燃える」などのようなある時間内続いて行なわれる動作・作用を表わし、「ている」が付くとその動作・作用が進行中であることを示す動詞が「継続動詞」, 「知る」や「届く」などのような瞬間的に終わってしまう動作・作用を表わし、「ている」が付くとその動作・作用が終わってその結果が残存していることを表わす動詞が「瞬間動詞」である、とされている。さらに、(19)の「継続動詞」の場合は「2日間」などのような継続時間表現で修飾できるが、(20)の「瞬間動詞」の場合は継続時間表現で修飾できない。

(19) 屋根が2日間焼けている。

(20) (i). *その女性が2日間倒れている。(ii). その女性がガンを2年間患って死んだ。
(20)(i)の場合、倒れた状態が2日間残存していることを表わすことができるが、その女性が立っていた状態から倒れる状態まで2日間かかるとは解釈できない。(20)(ii)の場合、2年の間にはまだ「死ぬ」という現象が始まっていない。2年の最後の瞬間に「死ぬ」ということが成立する。(19)と(20)から、「焼ける」は「継続動詞」で、「倒れる」と「死ぬ」は「瞬間動詞」である、と判断できる。金田一の分類で言うと、「様態・付帯状況」の複合動詞におけるV1もV2も「継続動詞」であるが、(18)の「原因」の複合動詞におけるV1は「継続動詞」で、V2は「瞬間動詞」である。このタイプの複合動詞は次のようなものが挙げられる。

(21) 流れ着く, 降り積もる, 焼け死ぬ, 焼け焦げる, 遊びくたびれる, 働きくたびれる, 泣き濡れる, 待ちくたびれる, 読み疲れる, ...

次に、V1がV2と同時に発生する場合($t_1=t_2$)を検討する。この場合、V1とV2の具体的な発生順序は次のように考えられる。

(22) V1が発生したとたん直ちにV2も発生する。V1の持続時間の幅がほとんどない。V1の動作において時間的な幅が許されないため、「瞬間動詞」が適切であると考えられる。一方、V2になれる動詞は、「落ちる」のような「継続動詞」でも、「死ぬ」や「曲がる」のような「瞬間動詞」でも可能である。このタイプの複合動詞は次のようなものが挙げられる。

(23) あふれ落ちる, 溺れ死ぬ, 折れ曲がる, 消え失せる, 死に絶える, 抜け落ちる, 抜け替わる, 干割れる, 痩せ衰える, ...

以上から、「原因」の複合動詞の適切な組み合わせは次のようにまとめられる。

グループ1

前項動詞も後項動詞も「動作主の意志によらない出来事を表わす動詞」である組み合わせ:

(24) ①【後項動詞が移動動詞の場合】

「位置変化動詞+移動動詞」: あふれ落ちる, 抜け落ちる, ...

②【後項動詞が位置変化動詞の場合】

「移動動詞+位置変化動詞」: 流れ着く, ...

「位置変化動詞+位置変化動詞」: 消え失せる, 抜け替わる, 降り積もる, ...

③【後項動詞が状態変化動詞の場合】

「状態変化動詞＋状態変化動詞」：笑み割れる、老いさらばえる、老い^え癒れる、
溺れ死ぬ、折れ曲がる、凝り固まる、死に絶える、煮え滾る、煮え立つ、
濡れそぼつ、干^ひ反る、干割れる、曲がりくねる、焼け死ぬ、焼け焦げる、
痩せ衰える、痩せこける、痩せさらばえる、痩せ細る、酔い^い癒れる、沸き立つ、...

グループ2

前項動詞が「動作主の意志による行為を表わす動詞」で、後項動詞が「動作主の意志によらない出来事を表わす動詞」である組み合わせ：

(25) ①【後項動詞が位置変化動詞の場合】

「移動動詞＋位置変化動詞」：逃げ失せる、...

②【後項動詞が状態変化動詞の場合】

「活動動詞＋状態変化動詞」：遊びくたびれる、遊びほうける、恋い焦がれる、
立ち疲れる、泣き濡れる、寝静まる、寝惚ける、働きくたびれる、待ちくたびれる、
待ち焦がれる、病みほうける、読み疲れる、...

5. 「原因」の複合動詞の問題点

5.1 状態変化に関わる出来事を表わす動詞と位置変化に関わる出来事を表わす動詞との組み合わせ

上の4節で挙げた「原因」の複合動詞の組み合わせ以外に、一義的経路の制約に反しているにもかかわらず、「原因」の複合動詞の可能な組み合わせとして認められるものがある。それらは状態変化に関わる出来事を表わす動詞が位置変化に関わる出来事を表わす動詞と一緒に組み合わせるものである。まず、そのような組み合わせを以下に挙げる。

グループ1

前項動詞も後項動詞も「動作主の意志によらない出来事を表わす動詞」である組み合わせ：

(26) ①【後項動詞が移動動詞の場合】

「状態変化動詞＋移動動詞」：崩れ落ちる、焼け落ちる、...

②【後項動詞が位置変化動詞の場合】

「状態変化動詞＋位置変化動詞」：焦げ付く、焼け付く、...

グループ2

前項動詞が「動作主の意志による行為を表わす動詞」で、後項動詞が「動作主の意志によらない出来事を表わす動詞」である組み合わせ：

(27) 【後項動詞が状態変化動詞の場合】

「移動動詞＋状態変化動詞」：走りくたびれる、走り疲れる、...

「位置変化を表わす使役動詞＋状態変化動詞」：飲みつぶれる、着膨れる、...

以上のような組み合わせはなぜ「原因」の複合動詞として容認されるのか、ということをも金田一 1976 を用いて説明する。一義的経路の制約に反している状態変化に関わる出来事を表

わす動詞と位置変化に関わる出来事を表わす動詞との組み合わせである(28)「焼け落ちる」と(29)「*死に落ちる」を例として検討する。

- (28) (i). 屋根が真っ黒に焼けた。 (ii). *屋根が真っ黒に落ちた。
(iii). ??屋根が真っ黒に焼け落ちた。

- (29) (i). 枝に止まっていた鳥が死んだ。 (ii). 枝に止まっていた鳥が地面に落ちた。
(iii). *枝に止まっていた鳥が地面に死に落ちた。

(「*死に落ちる」という言い方は実際には存在しないが、ここでは、「(i)の枝に止まっていた鳥が死んだことが原因で、(ii)地面に落ちた」という結果を示すとする)

(29)の「*死に落ちる」の場合、「焼ける」と同じ「状態変化動詞」である前項動詞「死ぬ」が「位置変化を表わす移動動詞」である「落ちる」のような動詞と組み合わせる際、なぜ(28)の「焼け落ちる」と違って不適切であると認められなければならないのか。その理由は、前述の「継続動詞」と「瞬間動詞」との違いに関する。

(28)(ii)の「落ちる」が「焼ける」の前に来る状態変化を示す副詞「真っ黒」を取らないことから、(28)(iii)のように「屋根が焼け落ちた」時、屋根が真っ黒になるまで焼けたかどうかということは「焼け落ちる」ことにおいてあまり重要ではない。その理由は次のようである。(28)(i)のように「真っ黒に焼けた」とは言えるが、(28)(iii)の「??真っ黒に焼け落ちた」とは言いがたい。「継続動詞」である「焼ける」という動作は、瞬間的に終了せず、継続することが可能である。「屋根が焼ける」の場合、一旦屋根に火がついたら、真っ黒になるまで燃焼する動作が継続することが可能である。ところが、真っ黒になるまでではなく途中の時点で屋根が落ちて「焼け落ちる」という事象は成立する。一方、「瞬間動詞」である「死ぬ」という動作は対象がすぐ「死亡(生命がなくなった)」という瞬間的な状態変化にならざるをえないことを意味している。言い替えれば、「死ぬ」という動作には生きていた時点から死ぬまでの間に時間的な幅があると考えられない。動作の開始から終了までの間に時間的な幅がない「瞬間動詞」では、その時間的な幅の中で何らかの「動き」が発生することができない。「位置変化動詞や移動動詞」と組み合わせる時でも、「死ぬ」が表わす動作は「完全な死亡」状態にならないと「死ぬ」とは言えない。同じ「状態変化動詞」であるにもかかわらず、「継続動詞」である「焼ける」と「瞬間動詞」である「死ぬ」では、状態変化の表わし方が異なっている。「焼ける」の場合、焼けたからといって、少し焦げたような茶色っぽい状態でも、かなり焦げたような黒色っぽい状態でも、完全に真っ黒になった状態でも、以上のような様々な段階においてすべて「焼ける」と言える。言い替えれば、「焼ける」状態の中で様々な程度の「焼け方」がある。「位置変化動詞や移動動詞」と組み合わせる時、例えば、「屋根が焼け落ちる」の場合、屋根が少し焦げたような茶色っぽい状態に焼けた結果、落ちるか、かなり焦げたような黒色っぽい状態に焼けた結果、落ちるか、完全に真っ黒になった状態に焼けた結果、落ちるか、のようにどの程度まで焼けた結果落ちるか、ということはいずれの場合でも、屋根が「焼けた」という事実が発生し、そして「落ちる」という事実も確実に発生すれば、「焼け落ちる」と認められる。このように

「位置変化動詞や移動動詞」と組み合わせる時、具体的な状態変化をあまり重要視しない「継続動詞」である「焼ける」は、(28)(iii)のように「??真っ黒に焼け落ちた」とは言いがないから、具体的な状態変化を表わしていないと考えてもよいだろう。すなわち、「焼ける」のような動詞は具体的な状態変化を表わしていないため、「落ちる」と組み合わせざっても、一義的経路の制約に反しない。その結果、(28)の「焼け落ちる」は適切な複合動詞の組み合わせとなる。ところが、「死ぬ」には、「死亡」という状態しか存在しない。たとえ瀕死状態の患者でも、その患者が「死んだ」とは言えない。「生存（生命がまだある）」と「死亡（生命がなくなった）」との間にはほかの状態の存在が認められない。すなわち、「継続動詞」である「焼ける」のように、「生存」と「死亡」の間に、少しだけ「死亡」になった状態やかなり「死亡」になった状態などのような様々な程度の「死亡」状態が存在しない。「死ぬ」と考えられる状態は唯一完全に「死亡」になった状態しかない。仮に、「死ぬ」という動詞が具体的に完全に「死亡」になった状態の変化を表わしていないのであれば(例えば、少しだけ「死亡」になった状態、一体「*死に落ちる」の「死ぬ」が何を表わすのか、そして、枝に止まっていた鳥が完全に死んでいないのになぜ地面に落ちたのか。ここで矛盾が生じる。したがって、鳥が完全に「死亡」状態になったので、枝から地面に落ちた、としか考えられない。すなわち、「死ぬ」のような動詞は具体的な「生存」から「死亡」までの状態変化を明確に表わすため、「落ちる」と組み合わせると一義的経路の制約に反する。その結果、(29)の「*死に落ちる」は適切な複合動詞の組み合わせではない。以上をまとめると、前項動詞が「継続動詞」の場合に限って、状態変化に関わる出来事を表わす動詞と位置変化に関わる出来事を表わす動詞との組み合わせは適切である。

5.2 「持ち上がる」のような自他対応がある複合動詞が「原因」の複合動詞として認められるかどうかという問題

最後に、「持ち上がる」や「踏み固まる」などのような自動詞と、それに対応している他動詞形（「持ち上げる」や「踏み固める」）との関係について議論する。この他動詞形の多くは、以下の(30)のように括弧内で示す「手段」の複合動詞である。松本 1998：57 では、このような他動詞からの自動詞化によって前項動詞が後項動詞の原因を表わす複合動詞が生じるとしている。まず、このようなもの(松本 1998 の例も含めて)を以下に提示する。

(30) ①【後項動詞が動作主の意志によらない出来事を表わす動詞の場合】

「活動動詞+移動動詞」:

打ち上がる(打ち上げる), 押し上がる(押し上げる), 組み上がる(組み上げる),
 繰り上がる(繰り上げる), 蹴上がる(蹴上げる), 競り上がる(競り上げる),
 突き上がる(突き上げる), 突き通る(突き通す), 突き抜ける(突き抜く),
 吹き上がる(吹き上げる), 吹き飛ぶ(吹き飛ばす), 持ち上がる(持ち上げる), ...

「位置変化を表わす使役動詞+移動動詞」:

吸い上がる(吸い上げる), 迫り上がる(迫り上げる), 積み上がる(積み上げる),

吊り上がる(吊り上げる), 吊り下がる(吊り下げる), 盛り上がる(盛り上げる), ...

②【後項動詞が位置変化動詞の場合】

〔活動動詞+位置変化動詞〕:

組み合わせる(組み合わせる), 住み替わる(住み替える), 擦り付く(擦り付ける),
突き当たる(突き当てる), 突き刺さる(突き刺す), 突き立つ(突き立てる), ...

〔位置変化を表わす使役動詞+位置変化動詞〕:

入れ替わる(入れ替える), 吸い付く(吸い付ける), 積み重なる(積み重ねる),
張り付く(張り付ける), ...

〔状態変化を表わす使役動詞+位置変化動詞〕:

切り替わる(切り替える), 焼き付く(焼き付ける), ...

③【後項動詞が状態変化動詞の場合】

〔活動動詞+状態変化動詞〕: 擦り切れる(擦り切る), 擦り減る(擦り減らす),

引きちぎれる(引きちぎる), 踏み固まる(踏み固める), ...

〔状態変化を表わす使役動詞+状態変化動詞〕:

折り曲がる(折り曲げる), 断ち切れる(断ち切る), ...

4章で「原因」の複合動詞の特徴として次のようなことを提示した。V1がV2より先に発生する場合($t1 > t2$), V1の動作においてある程度の時間的な幅が許されるため, V1が「継続動詞」であり, V2が「瞬間動詞」でなければならない。一方, V1がV2と同時に発生する場合($t1 = t2$), V1の動作において時間的な幅が許されないため, 「瞬間動詞」が適切である。以上のような特徴を持っている次のような一部の自他対応がある自動詞の複合動詞が「原因」の複合動詞として捉えられそうである。

(31) 折り曲がる, 吸い付く, 擦り切れる, 擦り付く, 擦り減る, 焼き付く, ...

ところが, すべての自他対応がある自動詞の複合動詞は問題なく「原因」の複合動詞として捉えることができるわけではない。以下の例は, 「様態・付帯状況」の複合動詞として捉えられそうなV1もV2も「継続動詞」の組み合わせである。

(32) 打ち上がる, 押し上がる, 吸い上がる, 突き上がる, 積み上がる, 吹き上がる,
吹き飛ぶ, 持ち上がる, 盛り上がる, ...

さらに, 「押し開ける, 勝ち取る, 切り倒す, 騙し取る, 拭き取る, 振り混ぜる」などのような「手段」の複合動詞の場合, 対応している自動詞形の複合動詞を持っていない。すなわち, このような自他対応の関係はすべての「手段」の複合動詞に当てはまるわけではなく, 十分に体系化しているとは言えないのであろう。

(33) 太郎がドアを押し開けた。 → *ドアが押し開いた。

(34) 太郎が木を切り倒した。 → *木が切り倒れた。

(35) 太郎が(その女性の)お金を騙し取った。(=太郎がその女性のお金を騙し取った。)

※ *その女性が騙し取れた。 *お金が騙し取れた(可能の意味なら可)。

(36) 太郎が(ビンの)中身を振り混ぜた。(=太郎がビンの中身を振り混ぜた。)

※ *ピンが振り混ざった。

*中身が振り混ざった。

以上の議論から、自他対応がある自動詞の複合動詞が「原因」の複合動詞として捉えられそうなものも捉えられそうにないものもあるため、先行研究のようにすべてを「原因」の複合動詞として取り扱うことが難しいと考えられる。

6. おわりに

本稿では語彙的複合動詞における「原因」の複合動詞の中で、V1 と V2 との適切な組み合わせのパターンを検討し、それを具体的に提示した。これは、次のようにまとめられる。

(37) 「原因」の複合動詞における V1 の発生時間(t1)と V2 の発生時間(t2)との関係：

①. V1 が V2 より先に発生する または、②. V1 が V2 とほぼ同時に発生する

①と②のような「原因」の複合動詞における V1 と V2 の特徴：

		V1	V2
①の場合	動詞のアスペクトの側面	継続動詞	瞬間動詞
	動作主の意志の有無	動作主の意志があってもなくても可	動作主の意志がない位置や状態変化を表わす
②の場合	動詞のアスペクトの側面	瞬間動詞	「継続動詞」でも「瞬間動詞」でも可
	動作主の意志の有無	動作主の意志がない	動作主の意志がない位置や状態変化を表わす

【参考文献】

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』, ひつじ書房.

影山太郎 (1996) 『動詞の意味論——言語と認知との接点——』, くろしお出版.

影山太郎 (1999) 『形態論と意味』, 日英語対照による英語学演習シリーズ 2, くろしお出版.

金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』, むぎ書房.

松本 曜 (1997) 『空間と移動の表現』, 日英語比較選書 6, 中右 実編, 研究社.

松本 曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」, 『言語研究』 114 号, pp. 37-83.

山本陽子 (1996) 「語形成と語彙概念構造——日本語の「動詞+動詞」の複合語形成について」, 『言語と文化の諸相』, 英宝社. pp. 105-118.

Goldberg, A. E. (1991) "It Can't Go Down the Chimney Up: Paths and the English Resultative", *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, Berkeley Linguistics Society, University of California, Berkeley, pp 368-378.

Matsumoto, Y (1996) *Complex Predicates in Japanese, A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. CSLI Publications